



セーヤを出発して十五日目にナホトカに到着し、二週間船待ちをして五月十七日に最後の点呼をうけて恵山丸に乗り込むのです。

「自分の名前を呼ばれるまでは不安が去らなかつた。最後の点呼で名前が名簿になく、シベリヤに逆戻りさせられたのがいたそうだ。というような話があったからだ。出口でもう一度所持品検査があり、船着場につれていかれ、もう一度人員の確認があつた。あまりにしつこい手続きに気持ちはいらだち、不安がつつた。目の前の恵山丸を見ながら、早くあのタラップをあがって甲板に足を着けたいと思つた。甲板に上るまではずい不安は消えなかつた。」

(『私のシベリヤ』より)

貨車の旅で目を痛め、手製の眼帯をかけたが治癒せず、絵かきにとって命の次に大切な目をやられた不安とやっと帰国できるという安心感から身体の調子をくずすが、こんなところで本格的な病気になつたらまた帰られなくなるぞという気力だけでもちこたえたという聞きませす。二晩かかって舞鶴に着き、栈橋のMPを見たときは、今度はアメリカの収容所に入れられて重労働をさ

せられるのではないかと思つたそうです。

「タラップを降りて日本の土をふんだ。ゆるるタラップを踏みしめ、港に集っている人々を見たとき、ふと自分が亡霊のような気がした。自分の前の男も後の男もほんとうはみんな亡霊ではないのかという気がした。なぜだろうか、自分が亡霊というよりは亡霊を背中に背負っているという感じだったのかもしれない。」

復員列車で郷里に向かう中、島根に帰る戦友に津和野に住む生母への手紙を託し、厚狭駅から美祢線に乗り三隅に向かわれるのです。

軍隊とシベリヤでくり返しくり返し夢にみた三隅の生家、その生家が現実として目の前にあり、しばらくは眺めていたのです。

先生は出征するとき携行した絵具箱や飯ごうにモチーフを刻んでたどり着き、そして家族との対面に鼓動が激しくなつたのです……。

九月には下関高等女学校に復職し、教師として画家として再出発されます。

昭和三十一年十月にはヨーロッパへ絵かきとして旅立ち、その後あの『シベリヤ・シリーズ』にみられるカーボンブラッ

クに移行することになるのです。

## お礼

以上、みすみの文化発信基地 香月泰男とその芸術と人間像と題して八ヶ月の長きにわたり美術館の必要性や重要性をそして美術館建設についてのご理解と「文化の里づくりに」を推進するために掲載して参りましたがいかがでしたか。

特に画家香月泰男の人間像を理解していただくことが重要であると思ひ、長期掲載としました。画家の幼少時から出征そして敗戦、抑留体験、ヨーロッパ旅行をし、長い模索の果てにたどりついた白と黒の世界に確信を深め、『シベリヤ・シリーズ』という世界でただひとつの大作がふるさとみすみで生まれたのです。

この連載に際し、大変ご協力を賜りました山口県立美術館副館長足立明男先生、下関市立美術館副館長木本信昭先生、そしてご協力をいただきました関係各位に厚くお礼を申し上げます。

長期間本当にありがとうございます。ご意見・ご感想を是非ご投稿ください。